

宮崎
翔

「リフレイン」

登場人物	沢渡 湊	糸子	沢渡 浩治	白鳥 渚	女の子	占師	浮浪者	店主	救命士	主婦	女
	(16)	(28)	(45)	(44)	(16)	(60)	(80)				
	高校一年生。	高校一年生。 湊の恋人。	湊の父。	湊の母。	高校一年生。 湊の友人。						

○沢渡家・湊の部屋（朝）

乱雑な男子高校生の部屋。

付箋が貼られたデート雑誌が床にある。

沢渡湊（16）、ヘアワックスで髪を
セットしている。

鏡に向かって大きく頷き、部屋を出る。

○同・ダイニング（朝）

沢渡渚（44）、朝食を用意している。
湊、髪型を気にしながらやって来る。

湊 「おはよう」

渚 「おはよう。食べていくでしょう？」

湊 「うん、軽く」

沢渡浩治（45）、新聞をとじる。

浩治 「何だ、出かけるのか？」

渚 「ほら、今日は彼女と……」

浩治 「ああ、そうだった。楽しんでこいよ。
もしかして泊まりか？」

渚 「そんなわけないでしょう」

浩治 「小遣い足りてるか？ なければ貸すぞ」

湊 「大丈夫。あらゆる事態を想定してある」

テレビはニュース番組を映している。

アナウンサーの声「5月5日、ゴールデンウィーク最終日は、全国的に晴れて絶好のお出かけ日和になりそうです」

湊、手を合わせ、パンをかじる。

アナウンサーの声「南武動物公園でホワイトタイガーの赤ちゃんが生まれました。オス三頭、メス一頭の四兄妹で、国内で飼育されているホワイトタイガーは三十九頭になりました。南武動物公園ではホワイト……」

○同・洗面所（朝）

湊、熱心に歯を磨いている。

口が匂わないか何度も確認する。

○同・玄関（朝）

湊、新品のローファーを履く。

靴棚の上に大きな花瓶がある。

渚 「遅くなりそうだったら連絡して」

湊 「分かってる。じゃあ、いってきます」

湊、上機嫌で出ていく。

渚 「まだ子どもだと思ってたのに」

浩治 「見てないところで成長するものさ」

○同・外（朝）

湊、スマホを取り出す。

湊のメッセージ「今、家を出たよ」

紬のメッセージ「こっちはまだかかりそう」

○噴水公園（朝）

大きな噴水がある公園。

湊、ベンチに腰かける。

噴水の周りで子どもたちがボール遊び

や追いかけてっこをしている。

三歳くらいの幼児、躓いて転倒する。

母親らしき女性、すぐに駆け寄る。

ジェラートを食べている男性の頭部に

ビニールボールが当たる。

女の子（5）、湊をじっと見ている。

女の子「まいご？」

湊 「迷子って俺が？ いや、違うよ」

女の子「まいごでしょ？ ずっとひとりだよ」

湊 「待ち合わせしてるんだ」

女の子「ほんと？」

女の子、湊の隣に座る。

湊 「君こそ迷子じゃないの。お母さんは？」

女の子「おうちにいる」

湊 「お父さんは？」

女の子「うーん、げんき？」

湊 「俺に聞かれても。一人で来たの？」

女の子「うん、おじいちゃんにたのまれた」

湊 「何を？」

女の子「えーっと、なんだっけ？」

湊 「だから、俺に聞かれても」

女の子「きいてくる」

女の子、ベンチから下りて駆け出す。

湊 「何だったんだ？ 変な子だな」

綾織紬（16）、小走りやって来る。

紬 「湊くん、お待たせ」

湊 「いや、全然待ってないよ。勝手に早く来て待ってただけだから」

紬 「ふ、待ったの？ 待ってないの？」

湊、紬の服装に見惚れる。

湊 「綾織の私服って初めて見るけど、すごくいいね。似合ってる」

紬 「ありがとう。あまり見ないで。照れる」

○並木道

湊と紬、並んで歩いている。

湊 「ソファ席がお勧めって書いてあった。

寝転がって星を見るのがいいんだって」

紬 「楽しみ。プラネタリウム初めてだから」

○プラネタリウム・正面入口

湊と紬、張り紙の前で固まっている。

大きく「改装中」と書かれている。

紬 「改装につき営業再開は来月……」

湊 「これは想定してなかった」

○並木道

湊、歩きながらスマホを操作している。

紬 「歩きスマホは危ないよ」

湊 「この辺にいい店があると白鳥が言っていたんだ。どこだっけな」

紬 「もう随分歩いてるよ」

湊 「そうだ、ラビットハウスって店だ」

湊、スマホを仕舞い、足早に歩く。

紬、歩きにくそうについていく。

○駅前通り

飲食店が立ち並ぶ駅前通り。

湊 「ないな。こっちじゃないのか」

湊、振り返る。

紬、離れた所で立ち止まっている。

湊 「どうかした？」

紬 「え、ううん、なんもないよ」

紬、笑顔が引きつっている。

足を一步踏み出し、顔をしかめる。

湊 「もしかして、どこか怪我した？」

紬 「ううん、大丈夫」

紬、また一步踏み出し、顔をしかめる。

湊 「足？」

紬、小さく頷く。

湊、辺りを見回す。

クレープ屋の前にベンチがある。

○クレープ屋・屋外ベンチ

湊、紬を座らせ、靴を脱がす。

紬 「はあ、楽になった」

湊 「ごめん、無駄に歩かせた」

紬 「ううん、パンプスに慣れてないだけ」

湊 「靴下、脱がしていい？」

紬 「いや、だめだめ！ 蒸れてるから」

湊 「ちゃんと手当てしないと」

紬 「少し休めば治るから」

湊 「分かった。ちよつと待ってて」

○同・カウンター

湊、クレープ屋の店主に注文をする。

湊 「えっと、バナナとイチゴください」

店主 「あいよ」

○同・屋外ベンチ

湊、両手にクレープを持っている。

湊 「バナナとイチゴ、どっちがいい？」

紬 「イチゴ」

湊 「はい、お詫びにもならないけど」

紬 「ありがとう」

紬、クレープを食べる。

紬 「おいしい！」

湊 「この辺で一番美味しいんだって」

紬 「それも雑誌で調べたの？」

湊 「初めてのデートだからいいとこみせた
くて。何もしてないのにもう12時だけど
街頭の時計は12時を指している。

紬 「気持ちは嬉しいけど無理しないで。こ
うやってお喋りしてるだけで楽しいから」

湊 「綾織……」

紬 「といっても、私も無理して足を痛くし

ちやっただけだ」

湊と紬、笑い合い、ふと沈黙する。

湊 「もしかして、キスするタイミングだった？」

紬 「全然違う。焦らないでよ」

紬、ふと車道を見て、硬直する。

湊 「どうかした？」

紬、湊を思い切り突き飛ばす。

湊、ベンチから転げ落ちる。

次の瞬間、大型トラックが猛スピードでベンチに突っ込む。

湊、吹き飛ばされ、後頭部を強打する。

×

×

×

湊、ゆっくりと目を覚ます。

悲鳴や怒声で周囲は騒然としている。

トラックはベンチを跡形もなく吹き飛ばし、ビルの外壁に突っ込んでいる。

紬、トラックの下敷きになっている。手足はあらゆる方向に曲がり、折れた骨が皮膚を破り、血だまりができています。

湊 「綾織……」

紬、湊の呼びかけに気付く。

真っ青な顔でかすかに口を動かす。

湊、這いずり、紬に近付いていく。

救命士がやって来る。

救命士 「大丈夫ですか！」

湊 「トラッ……下に……ひと、が……」

救命士 「動かないでください！」

救命士、湊をストレッチャーに乗せる。

湊 「ちがつ……先に……綾織、を……」

湊、抵抗するが、次第に意識が遠のく。

○同・同（朝）（日替り）

湊、クレープ屋のベンチで寝ている。

店主、湊の肩を揺する。

店主 「そろそろ店を開けたいんだけど」

湊、ベンチから転げ落ちる。

湊 「うわあああつ……！」

湊、立ち上がり、辺りを見回す。

何ら変哲のない静かな駅前通りがある。

湊 「事故はどうなったんですか！」

店主 「事故？」

湊 「トラックが突っ込んできたでしょう！

ベンチをバラバラにして……」

湊、傷一つないベンチを指さす。

店主 「知らないな。いつの話だ？」

街頭の時計は8時を指している。

湊 「昨日の昼です。その証拠にコブが……」

湊、後頭部をさする。

湊 「できてない。何で？ 痛みはあるのに」

店主 「豪快な寝ぼけ方だな」

湊 「女の子はいませんでしたか？ 16歳、

綾織紬。すごく可愛い感じの」

店主 「それだけじゃ分からないな」

湊 「待って下さい。写真が……」

湊、スマホを取り出し、硬直する。

5月5日と表示されている。

湊 「今日って何日ですか？」

店主 「5月5日。ゴールデンウィーク最終日」

○綾織家・外（朝）

立派な門構えの一軒家。

表札に「綾織」の文字。

湊、チャイムを鳴らすが、反応はない。

ポケットからスマホを取り出す。

湊のメッセージ「今どこ？」

メッセージに既読判定はついてない。

湊、身を乗り出し、庭を覗き込む。

主婦「泥棒！」

通りすがりの主婦、湊を睨んでいる。

湊「違います！ この家に用があつて」

主婦、携帯電話を取り出す。

主婦「警察、警察……」

湊「ちが、違うって言うのに！」

湊、主婦に背を向け、走り出す。

○並木道（朝）

湊、肩で息をしている。

湊「別に、逃げることに、なかったか」

○沢渡家・外（朝）

湊、そっと玄関の扉を開ける。

○同・ダイニング（朝）

湊、恐る恐るダイニングに入る。

渚、朝食を用意している。

渚 「おはよう。食べていくでしょう？」

浩治、新聞をとじる。

浩治 「何だ、出かけるのか？」

渚 「ほら、今日は彼女と……」

浩治 「ああ、そうだった。楽しんでこいよ。

もしかして泊まりか？」

湊 「待って！ 昨日って何日だった？」

浩治 「今日が5日だから、4日だろ」

テレビはニュース番組を映している。

アナウンサーの声 「5月5日、ゴールデンウ

イーク最終日は、全国的に晴れて……」

湊 「全部、夢だった？ いや、まさか……」

湊、後頭部をさする。

渚 「湊、そろそろ準備しなくていいの？」

湊 「あ、そうだ！」

○噴水公園

湊、焦り顔でベンチに座っている。

紬に電話するが、繋がらない。

○クレール屋・屋外ベンチ

若いカップル、ベンチに座ろうとする。

湊 「座らないで下さい！」

湊、若いカップルを追い払う。

湊 「みなさん、離れて下さい！ 危険です」

湊、大声で通行人を追い立てる。

店主 「今朝の兄ちゃんか？ 商売の邪魔だよ」

湊 「居眠り運転のトラックが突っ込んでく

るんです！」

店主 「いつ？」

湊 「もうすぐです。いいから離れて下さい」

街頭の時計は12時を指している。

湊、車道を睨み、身構える。

だが、何も起こらず、3分経過する。

湊 「あれ？ おかしいな」

店主 「いい加減、どっか行ってくれ！」

○並木道

湊 「やっぱり夢だったのかな」

○綾織家・外（夕）

湊、チャイムを鳴らすが、反応はない。

○同・庭（夕）

湊、柵を乗り越え、庭に侵入する。

湊 「弁償しますから」

落ちていた石で窓ガラスを割る。

○同・リビング（夕）

湊、窓を開け、リビングに侵入する。

人の気配はない。

○同・紬の部屋（夕）

ピンク色が多めな女子高生の部屋。

人の気配はない。

○同・外（夜）

湊、中から玄関の扉を開け、座り込む。

ポケットからスマホを取り出す。

湊のメッセージ「友達の家泊まるから」

渚のメッセージ「ご迷惑にならないようにね」

湊、スマホを仕舞い、膝を抱える。

湊「何でどこにもいないんだ、綾織……」

○同・同（朝）（日替り）

湊、ゆっくりと目を覚ます。

○同・庭（朝）

湊、庭を覗き込み、愕然とする。

柵を乗り越え、窓ガラスに触れる。

窓ガラスは傷一つついてない。

主婦「泥棒！」

湊、驚いて振り返る。

主婦、通りから湊を睨んでいる。

湊 「だから、違っ…違わないか！」

湊、柵を乗り越え、走り出す。

○沢渡家・外（朝）

湊、息を切らし、玄関の扉を開ける。

○同・ダイニング（朝）

渚、朝食を用意している。

渚 「おはよう。食べていくでしょう？」

浩治、新聞をとじる。

浩治 「何だ、出かけるのか？」

湊 「聞いて！俺、今日を繰り返してる！」

浩治 「は？」

湊 「今日は5月5日だけど、昨日も5月5

日で、その前も5月5日だったんだ！」

浩治 「よく意味が分からないんだが」

テレビはニュース番組を映している。

アナウンサーの声 「南武動物公園でホワイト

タイガーの赤ちゃんが生まれまし…」

湊 「オス三頭、メス一頭の四兄妹で、飼育

されているホワイトタイガーは三十九頭！
アナウンサーの声「三十九頭になりました」

湊 「ほら！」

浩治「昨日の夜に生まれたんだから、みんな知ってるだろ。それよりも……」

アナウンサーの声「南武動物公園ではホワイ

トタイガーの赤ちゃんの名前を募集中です」

浩治「何て名前になるんだ？」

湊 「知らないよ。今日のことしか知らない。

それに、繰り返してると言っても、事故が起きなかったり色々違いはあるんだ」

浩治「上手い言い訳考えたな」

湊 「本当なんだって！」

渚 「湊、そろそろ準備しなくていいの？」

湊 「あ、そうだ！ って同じ反応してるな」

○噴水公園（朝）

湊、焦り顔でベンチに座っている。

白鳥（16）、のんびりとやって来る。

白鳥「よう、湊。急ぎの用って何だ？」

湊 「白鳥、こっち。こっち座ってくれ」

白鳥 「こんな朝早くに藪から棒だな」

湊 「そこで歩いてる男の子、今に転ぶぞ」

三歳くらいの幼児、躓いて転倒する。

白鳥 「あらら、大丈夫か？」

湊 「大丈夫。すぐに母親が来る」

母親らしき女性、すぐに駆け寄る。

湊 「アイスを食べてる人にボールが当たる」

ジェラートを食べている男性の頭部に

ビニールボールが当たる。

湊 「ほら！ どうして分かったかというと、

昨日も一昨日も見たからなんだ」

白鳥 「昨日も一昨日も？」

湊 「つまり、3回目なんだ。なぜか分から

ないけど、俺は5月5日を繰り返してる」

白鳥 「（溜息）湊、今日はデートのはずだろ。

何してんだ？ 綾織にふられたのか？」

湊 「違う。どこにもいないんだ」

白鳥 「どこにもって？」

湊 「部屋にも、どこにも」

白鳥「親御さんが入れてくれたのか？」

湊「いや、綾織の親父さんは単身赴任中で、週末はお袋さんが手伝いに行くからともといない。だから、窓を割って入った」

白鳥「おまつ、朝早くから何てことを！」

湊「いや、割ったのは昨日の夕方。日付でいうと今日なんだけど。あと、割った窓は朝になったら元に戻っていたから大丈夫だ」

白鳥「マジで病院行った方がいいぞ……」

湊「信じてくれ。嘘じゃないんだ。さっきのボールはどう説明する？」

白鳥「ガキどもに100円握らせたんだろ」

白鳥、立ち上がり、湊に背を向ける。

白鳥「お前とは二度と口を利きたくない」

○同（朝）（日替り）

湊、退屈そうにベンチに座っている。

白鳥、のんびりとやって来る。

白鳥「よう、湊。急ぎの用って何だ？」

○競馬場

白鳥、震える手で「2・12・4」と書かれた3連単の馬券を持っている。

競走馬が券通りにゴール板を通過する。

白鳥「また、また当たった！」

○同・場外馬券売場

歓声が漏れ聞こえる場外馬券売場。

湊、退屈そうに壁に寄りかかっている。

占師（60）、小汚い格好をして路上で手相占いをしている。

占師「お兄さん、みてあげるからおいで」

湊、逡巡した末、占師に手をみせる。

占師「大変な目にあってるようだね」

占師、湊の顔をじっと見つめる。

愛撫のように執拗に手を撫でまわす。

湊「あの、離してください……」

湊、手を引き抜こうとする。

占師、逃がすまいと強く握りしめる。

白鳥「何やってるんすか！」

白鳥、強引に二人を引き離す。

湊 「痛っ！」

白鳥 「行こうぜ」

占師 「ま、待って、待って！」

湊と白鳥、追いつがる占師を振り切る。

○ガールズバー（夜）

白鳥、バニー姿の女をはべらせている。

長時間、飲み食いした形跡がある。

足元には札束の詰まったバッグがある。

湊、女に札束を一つ押し付ける。

湊 「お姉さん、もうサービスは結構です」

女 「はい。白鳥くん、また来てね」

女、名残惜しそうに立ち去る。

白鳥 「何だよ、いいところだったのに」

湊 「ラビットハウスがガールズバーとは思

わなかったよ。で、いい加減、信じたか？」

白鳥 「ああ、もう参った。お前は今日を繰り返

返してる。じゃなかったら競艇の神様だ」

湊 「綾織はどこにいますか？」

白鳥「小学校からの同級生といっても、あんまり話したことないからな」

湊「じゃあ、同じ日を繰り返す意味は？」

白鳥「事故の後遺症で繰り返しの能力を手に入れた、っていうのは漫画っぽいかな」

湊「……」

白鳥「また頭をぶつけたら能力は消えるかも」

湊「窓と違って、俺についた傷は一晚では治らない」

湊、袖をまくる。

引っ掻かれた傷痕が薄っすらとある。

白鳥「痛そうだな」

湊「やっぱり覚えてないか」

白鳥「ん？」

湊「これは妙な占師に引っ掻かれた時の傷だよ。3回前だ。お前もその場にいたのに」

白鳥「……」

湊「みんな同じだ。なかなか信じなくて、やっと思っても朝になったら全部忘れてる。

お前にも10回以上話したのに」

白鳥「そうだったのか。俺、馬鹿みたいだな」

湊「そう思ったこともすぐに忘れるよ」

湊、ソファに横になり、目を閉じる。

○同（朝）（日替り）

湊、ゆっくりと目を覚ます。

店内には誰の姿もなく、片付いている。

○沢渡家・ダイニング（朝）

テレビはニュース番組を映している。

アナウンサーの声「5月5日、ゴールデンウ

イーク最終日は、全国的に晴れて……」

浩治「小遣い足りてるか？ なければ貸すぞ」

湊「あのさ、あの世ってどういう所かな？」

浩治「宗教の話か？ よく分からないな」

○噴水公園

湊、ベンチに座り、放心している。

○高校・正門（夜）

湊、門の上に寝転がり、放心している。

○綾織家・外（夕）（日替り）

湊、扉にもたれかかり、放心している。

ふと、気配を感じて顔を上げる。

糸子（28）、湊を見下ろしている。

細い手足にゆったりした服を着ている。

糸子「こんにちは」

湊「あなたは、誰ですか？」

糸子「私は糸子。綾織紬の従姉」

湊「綾織の従姉で糸子？ 本名ですか？」

糸子「他に知りたいことがあるんじゃない？」

君、今日を繰り返してるでしょう？」

湊「どうして分かるんですか！」

糸子「私も同じだから」

糸子、植木鉢の下から鍵を見つける。

鍵穴に差し込み、扉を開ける。

糸子「窓を割るよりいいでしょう？」

○同・リビング（夜）

テーブルにお茶菓子が並んでいる。

糸子「結論から言うと、君は生きてる」

湊「そうなんですか？ とつくに死んでて、

あの世にいるんだと思ってました」

糸子「そう思うのも無理ないけどね。死ぬよ

うな怪我はしてないでしょう？」

湊「多分」

糸子「だったら自信を持ちなさい。目が濁ってるよ」

湊「何で世界は繰り返してるんですか？」

糸子「ハッキリしたことは言えない。推測はできるけどね」

湊「何か理由があるんですか？」

糸子「ええ、確信してる」

湊「綾織がいないことにも理由が？」

糸子「あの子の居場所なら心当たりある」

湊「本当ですか！」

糸子「いくつか思い当たる場所がある。あと
言い忘れたけど、私、帰国子女だから」

湊「はあ、そうですか。なんか唐突ですね」

糸子、お菓子を次々と口に入れる。

湊 「いいんですか？ 勝手に食べて」

糸子 「ご両親は帰ってこない。だからデートに誘ったんじゃないの？ あわよくばって」

湊 「ちがいますよ！」

糸子 「若いねえ。青春だねえ」

湊 「糸子さんはいくつなんですか？」

糸子 「女性に年をきくなど教わらなかった？」

湊 「じゃあ、干支は？」

糸子 「羊」

湊 「同じです。ということは、十二歳差か」

糸子 「やってくれたね……」

湊 「干支をきくなどは教わらなかったの。

そろそろ綾織を探しにいきませんか？」

糸子 「湊くん、繰り返しの心構えを教えてくださいる」

湊 「何ですか？」

糸子 「なるべく普段通りに過ごすこと。今日はもう帰りなさい。ご両親が心配するから」

湊 「どうせ朝になったら忘れてますよ」

糸子「先輩の言うことはきくものよ。私は、君より少しだけ多く繰り返してるんだから」

湊「（溜息）分かりました」

糸子「じゃあ、明日から駅前で待ち合わせね」

○沢渡家・玄関（夜）

湊、靴を脱ぎ散らかす。

浩治と渚、心配そうにやって来る。

渚「どうしたの？ ただいまも言わないで」

湊「疲れてるんだ」

浩治「もしかして、上手くいかなかったのか？」

湊「何でもいいよ。嘘つくのも面倒だから」

浩治と渚、顔を見合わせる。

○駅前（日替り）

人通りの多い駅前。

湊、「家族の絆」と題されたモニユメントの前で待ちぼうけしている。

糸子、肩を落とし、俯いてやって来る。

湊に気付かず、そのまま通り過ぎる。

湊 「ちよつと糸子さん、どこ行くんですか」

糸子、振り返り、目を見開いて驚く。

湊 「遅すぎですよ。来ないかと思いました」

糸子 「……」

湊 「もしかして、忘れちゃってます？」

糸子 「忘れるわけないよ。湊くん……」

糸子、湊をぎゅつと抱きしめる。

湊 「ちよつと、いくら帰国子女だからって」

湊、抵抗し、糸子の手から逃れる。

糸子 「帰国子女？」

湊 「そうですよ。日本人は挨拶代わりに抱

きついたりしません」

糸子 「嫌だった？」

湊 「別に、嫌ってことはないですけど」

糸子、ふたたび湊を抱きしめる。

通行人が驚いている。

湊 「俺には彼女がいるんですよ」

糸子 「知ってる」

湊 「気が済んだら早く案内して下さい」

糸子 「えっと、どこに案内するんだっけ？」

湊 「昨日、話したじゃないですか」

○レストラン（夜）

シャンデリアが輝く豪華なレストラン。

湊と糸子、向かい合って座っている。

湊 「すごい店ですね」

湊、辺りを見回す。

湊 「いませんね。しばらく待ちますか？」

×

×

×

湊、ケーキ菓子を口に入れる。

湊 「結局、来ませんでしたね」

糸子、湊をじっと見つめている。

糸子 「なんだか夢を見てるよう」

湊 「夢ならどんなにか良かったんですけど」

糸子 「あのさ、年上の女性って興味ある？」

湊 「え？」

糸子 「ううん、何でもない。忘れて」

湊 「はあ、今日は帰った方がいいですか？」

糸子 「えっ？」

湊 「本当は徹夜で探したいんですけど」

糸子「ちよっと待って」

糸子、手帳にペンを走らせる。

糸子「探す場所をメモしておかないと」

湊「何で綾織は自宅にいないんですか？」

糸子「混乱してるんだと思う。事故の影響ね」

湊「事故、ですか。他にどこに行きたいと

言っていましたか？」

糸子「色んなところ。君と色んなデートをし

たいと言ってたから」

湊「糸子さんとそんな話をしてたんですか」

○駅前通り（朝）（日替り）

湊、人の多い駅前通りを歩いている。

ビルから出てきた糸子と鉢合わせる。

湊「おはようございます。昨日と違って、

今日は遅刻じゃなさそうですね」

糸子「おはよう」

湊「ここに住んでるんですか？」

湊、ビルを見上げる。

糸子、すかさず湊の袖を引く。

糸子「行きましよう。今日こそ見つけないと」

○水族館

湊と糸子、寄り添って水槽を見ている。

湊「距離、近くないですか？」

糸子「海外なら普通だよ」

湊「綾織に誤解されたくないんですけど」

○遊園地（夜）

湊と糸子、並んで歩いている。

湊「遊園地で遊んだだけでしたね」

糸子「諦める？」

湊「まさか。続けます。明日も同じ時間で」

○駅前（朝）（日替り）

糸子、泣きそうな顔で立っている。

湊、小走りで駆け寄る。

湊「糸子さん、お待たせしてすみません」

糸子「遅いよ……」

湊「ほんの1、2分じゃないですか」

糸子「罰として、今日の支払いは君ね」

○ブティック

糸子、楽しそうに買い物をしている。

糸子「お金を気にしない買い物は最高だね」

湊「なんか楽しんでませんか？ 本当に綾

織が来たいと言ってたんですか？」

糸子「従姉の言うことが信用できない？」

湊「そういうわけじゃ……」

○花と緑のテーマパーク（夜）

湊と糸子、イルミネーションで作られ

た光のトンネルを歩いている。

糸子「綺麗。天の川を歩いてるみたい。プラ

ネタリウムの代わりになるかな」

湊「なりませんよ。別物ですから」

糸子「……」

湊「明日はどこですか？ 動物園ですか？」

糸子「待ってね」

糸子、手帳を取り出す。

湊 「（溜息）本当にどこにいるんですか」

○沢渡家・玄関（朝）（日替り）

湊、新品のローファーを履く。

靴棚の上に大きな花瓶がある。

渚 「遅くなりそうだったら連絡して」

湊 「……」

浩治 「初デートで緊張してるのか？」

湊 「うるさいな。いつもいつも同じことを」

浩治、ムっとして湊の腕を掴む。

浩治 「親に向かってうるさいと言ったか？」

湊 「（舌打ち）面倒くさいイベントが始まった。黙っておけばよかった」

浩治 「何を言ってるんだ？ こっちを見ろ」

湊 「離せ」

湊、浩治の手を振り払う。

腕が当たり、花瓶が落下して砕ける。

湊、無感動に眺め、出て行こうとする。

浩治 「待て！」

浩治、追いかけてようと足を踏み出す。

浩治 「痛っ！」

浩治、花瓶の破片で足の裏を切る。

血がだらだらと土間に流れる。

渚 「ああ、大変！ 救急箱を持ってきて。

靴、履いたままでもいいから」

湊 「一晚経てば治るよ」

湊、出て行こうとする。

渚 「待ちなさい！ 怪我してるのが分から

ないの？」

湊 「待ち合わせしてるんだけど……」

渚 「あなた、本当に湊？」

湊 「はあ？ 何言ってるんだよ」

渚、怯えた目で湊を見ている。

湊 「だから、怪我は治るか、ら……」

湊、渚に背を向け、走り出す。

○ 駅前

湊、がむしやりに走っている。

待ち合わせしている糸子を見つける。

息を切らしたまますがりつく。

糸子「わっ、びっくりした」

湊「俺、どこかおかしいですか？」

湊、小さく震えている。

○ホテル・客室（夜）

高級ホテルの一室。

糸子、湊のスマホで電話している。

糸子「はい、今は落ち着いてます。迷惑なくて、とんでもない。はい、代わりますね」

糸子、湊にスマホを渡す。

湊、暗い顔で受け取る。

湊「母さん、ごめん。父さんは？ よかった。白鳥の家に泊まるから。うん、また」

湊、通話を切り、寝台に仰向けになる。

湊「頭が変になりそうです。普段だったらどうしてたのかな……」

糸子「楽しいことだけ考えよう」

湊「それも繰り返しを生きる心構えですか」

糸子「まともでいつづけるのは難しいよ。狂った世界に心が合わせようとするから」

糸子、仰向けの湊にまたがる。

糸子「一人で背負うには重すぎるよね」

湊「俺には彼女が……」

糸子「知ってる」

糸子、湊にキスしながらボタンを外す。

○同・同（朝）（日替り）

湊、ゆっくりと目を覚ます。

糸子、すぐ隣で微笑んでいる。

糸子「おはよう」

湊「おはようございます」

糸子「よく寝てたね」

湊「久しぶりに熟睡しました。もしかして、

繰り返しは終わったんじゃないですか？」

糸子「残念ながら、今日も5月5日だよ」

湊「そうですか。でも、少しだけ気持ち

楽です。一人じゃないからでしょうか」

湊、寝台から起き上がる。

何も身に着けてないことに気付く。

慌ててシートで体を隠す。

湊 「ああ、昨日、夢中で……」

糸子 「上手くできてたよ」

湊 「本当ですか？」

糸子 「プライドを守ってあげたのかも」

湊 「今ならもっと上手くできるんですけど」

糸子 「へえー、証明してみる？」

× × ×

湊、汗だくで寝台に倒れ込む。

糸子、すぐ隣で荒い息を吐いている。

湊 「もう綾織は許してくれないな……」

糸子 「心を保つための遊びだよ。私は、未成年を墮落に誘う魔女みたいなものだから」

湊 「どう言い訳してもダメだと思います」

糸子 「そんなに嫉妬深い？」

湊 「分かりません。彼女のことあまり知らないんです。知り合ってまだ一ヶ月なので」

糸子 「どうして好きになったの？」

湊 「一目惚れでした。向こうもそうだって言ってくれたんですけど」

糸子 「……」

湊 「繰り返しが続くようなら、この世界の
アダムとイブになりませんか？」

糸子 「それも悪くないかもね……」

糸子、寝台から起き上がる。

糸子 「ちよつとごめん」

糸子、口を抑え、洗面所に駆け込む。

湊、脱ぎ散らかした下着を履く。

糸子、具合悪そうに戻ってくる。

湊 「大丈夫ですか？」

糸子 「うん、食あたりか何かだと思う」

○美術館（日替り）

湊と糸子、寄り添って絵を見ている。

湊 「体調はもういいんですか？」

糸子 「うん？」

湊 「昨日、食あたりだった」

糸子 「あ、うん。もう大丈夫。ありがとう」

湊 「思えば、心配できるのも同じ時間を過

ごしてるからこそなんですよね」

糸子 「本当にそうだね……」

○駅前（朝）（日替り）

湊、腕時計を確認する。

湊 「早く来すぎた。まあいいか」

湊、空を見上げ、大きく伸びをする。

白鳥、のんびりとやって来る。

白鳥 「よう、湊。珍しいところで会うな」

湊 「白鳥。この時間、ここを通るのか。何

回繰り返しても細かい発見はあるもんだ」

白鳥 「何の話だ？」

湊 「こっちの話だ」

白鳥 「ご機嫌だな。綾織と待ち合わせか？」

湊 「いや、綾織の従姉を待ってる」

白鳥 「従姉？ あいつに従姉はいないぞ」

湊 「そんなはずない。何度も会ってる」

白鳥 「昔、両親が一人っ子だからお年玉が少

ないと言ってた。お前、誰と会ってた？」

湊 「……」

○駅前通り（朝）

糸子、ビルから慎重に出てくる。

湊、待ち伏せし、背後から声を掛ける。

湊 「糸子さん」

糸子 「湊くん……」

湊、ビルを見上げる。

中ほどの窓に「こども園」とある。

湊 「託児所だったんですね。お子さんがいるとは知りませんでした」

糸子 「……」

湊 「他に隠してることはありませんか？ 綾

織の従姉というのも嘘なんでしょう？」

糸子 「（溜息）ここまでかな……。いいよ、教えてあげる」

湊 「何をですか？」

糸子 「君が一番知りたかった、世界の秘密」

○噴水公園

湊、怪訝そうに糸子を睨んでいる。

糸子 「私は、5月5日に死んだ。その痛みが今も少し残ってるから間違いない」

湊 「じゃあ、俺も？」

糸子 「君は大丈夫」

湊 「この世界は一体、何なんですか？」

糸子 「ここは、死んでしまった私に用意された世界。死んだ私の世界」

湊 「……」

糸子 「多分、私だけじゃなく、死んだ全ての
人に死を受け入れるための場所がある。納
得するまで死んだ日を繰り返し、心残りを
解消し、あの世へと旅立つ、神様か誰かが
用意してくれた世界が」

湊 「……」

糸子 「君は、5月5日に事故に遭い、私の世
界に迷い込んでしまった」

湊 「何で分かるんですか？ 植木鉢の下に
鍵があることとか、綾織のこととかも」

糸子 「私の世界だから」

湊、下唇を噛む。

湊 「糸子さんの心残りって何なんですか？」

糸子 「生きてる間に思いっきりデートしてみ

たかった。あまり縁がなくてね」

湊 「そんな……そんなことのために、俺に嘘をついたんですか？」

糸子 「丁度いい遊び相手が来てくれて、ついはいじやった。ごめんね」

湊 「もういいですよ。どうすれば、このくだらない世界から抜け出せますか？」

糸子 「死を受け入れれば、すぐに終わるはずだよ。君もそろそろ受け入れないと」

湊 「何をですか。俺は生きてるんですよ」

糸子 「綾織紬、彼女はもう死んでる」

湊 「っ！」

糸子 「君は見たはずだよ。助かるような怪我だった？」

○クレール屋・屋外ベンチ（回想）

紬、トラックの下敷きになっている。

手足はあらゆる方向に曲がり、折れた骨が皮膚を破り、血だまりができています。

○噴水公園

糸子「今日を繰り返す私の世界に、君が惹かれたのも無理ないけど、そろそろ目を覚まさなきゃ。死んだ子のことはもう忘れなよ」

湊、悔しそうにうつむく。

糸子「彼女の死を受け入れれば、繰り返しは終わる。君は、君の人生を生きて」

湊「……」

糸子「ごめんね。バイバイ……」

湊、ふと顔を上げる。

糸子はいなくなっている。

○並木道

湊、とぼとぼと歩いている。

○綾織家・外（夕）

湊、植木鉢の下から鍵を見つめる。

○同・紬の部屋（夕）

湊、思い詰めた顔で寝台に座っている。

湊 「（独り言）薄々気付いてた。君がもう

死んでいること。助けてくれてありがとう」

湊、振り切るように立ち上がる。

ふと、机の下に糸子の手帳を見つける。

手に取り、適当なページを開く。

「検査は陽性だった」と書かれている。

愕然とし、最初から読み始める。

○クレール屋・屋外ベンチ（朝）（手帳）

紬、ベンチの上で目を覚ます。

紬 N 「目覚めた時は、ベンチの上だった」

体をぎゅっと丸め、小さく震える。

紬 N 「しばらくは痛くて動けなかった。傷一

つないのに体中の骨が砕けたような痛みが

あった。私を押し潰す車の重さを感じた」

紬、ゆっくりとベンチから立ち上がる。

開店準備をしている店主に声を掛ける。

紬 「あのおう、事故はどうなったんですか？」

店主 「事故？ なんの事故？」

紬 「じゃあ、男の子はいませんでしたか？」

16歳、沢渡湊。すぐイケメンの」

店主「それだけじゃ分からないな」

紬「待って下さい……」

紬、ハンドバッグを覗く。

中にあるスマホや手鏡が、車に轆かれ
たように砕けている。

紬「やっぱり夢じゃないんだ……」

○沢渡家・外（手帳）

紬、玄関で渚と話している。

渚、湊を呼びに家の中に入っていく。

紬N「世界は5月5日を繰り返していた」

渚、紬の元に戻り、首を横に振る。

紬N「時々やってくる痛みが教えてくれた。

私はもう死んでいるということを」

○並木道（手帳）

紬、とぼとぼと歩いている。

紬N「ここが死後の一つ手前の世界だということは何となく分かった。好きな人を守っ

て死んだことにも悔いはなかった。ただ、
どうしても湊くん伝えたいことがあった」

浮浪者（80）、ボロボロの紙の束を

手に、歩道に座りこんでいる。

虚ろな目でぶつぶつと呟いている。

紬、まったく気付かず通り過ぎる。

紬 N 「事故のことを気にしてるだろうから。

責任を感じてるだろうから。でも……」

○高校・校舎内（夕）（手帳）

紬、校内を一人歩いている。

紬 N 「世界のどこにも湊くんはいなかった」

○プラネタリウム・外（夜）（手帳）

紬 N 「どこを探しても」

○沢渡家・湊の部屋（朝）（手帳）

紬 N 「どれだけ探しても」

○駅前（手帳）

紬、白鳥と立ち話をしている。

白鳥「そんなこと言われてもな。昨日話した時は、今日のデートを楽しみにしてたぞ」

紬「……」

紬、髪が肩まで伸びている。

白鳥「何か、休み前より随分髪の毛びてない？」

紬N「繰り返し返す世界でも私だけは年をとった」

○海岸（手帳）

紬、肩を落とし、海岸を歩いている。

紬N「心を保つのは大変だった。気が狂いそうになるのを必死で抑え込んだ」

両手で髪をくしゃくしゃに掻きむしる。

紬N「どうしても湊くんに伝えたかった。何より、私たちはデートの途中なのだから」

○噴水公園（夜）（手帳）

紬、ベンチに座り、ぶつぶつと呟く。

紬「湊くんは大丈夫。大丈夫……」

×

×

×

糸子（糸）、虚ろな目で呟いている。

糸子「大丈夫。きっとどこかにいる……」

○駅前（手帳）

糸 N 「再会は突然だった」

糸子、肩を落とし、俯いて歩いている。

湊 「ちよつと糸子さん、どこ行くんですか」

糸子、振り返り、目を見開いて驚く。

湊 「遅すぎですよ。来ないかと思いました」

糸子「……」

湊 「もしかして、忘れちゃってます？」

糸子「忘れるわけないよ。湊くん……」

糸子、湊をぎゅっと抱きしめる。

糸 N 「湊くんは、私を糸子と呼んだ。昨日、

そう名乗ったのだと。夢を見てるようだった。

うかつなことを言うと夢が覚めてしま

いそうで、ひたすら話を合わせた」

○レストラン（夜）（手帳）

シャンデリアが輝く豪華なレストラン。

湊と糸子、向かい合って座っている。

紬N「湊くんは私に気付かなかった。当然だ。

十歳以上も年をとってしまったのだから」

糸子「あのさ、年上の女性って興味ある？」

紬N「幻滅されそうで言い出せなかった」

○美術館（手帳）

湊と糸子、寄り添って絵を見ている。

紬N「次の日、私たちは、私を探した。私に

とっては念願のデートの続きだった」

湊「体調はもういいんですか？」

糸子「うん？」

湊「昨日、食あたりだった」

糸子「あ、うん。もう大丈夫。ありがとう」

紬N「やはり、時間の流れに決定的な違いが

あった。私が経験してない日を、湊くんは

経験していた。世界が歪に絡み合っていた。

でたらめに、子どもが悪戯したみたい」

○駅前（朝）（手帳）

糸子、不安そうに辺りを見回している。

紬 N 「次の日、湊くんは来なかった」

× × ×

糸子、寂しそうに待ちぼうけしている。

紬 N 「その次の日も、そのまた次の日も……」

× × ×

糸子、泣きそうな顔で立っている。

紬 N 「私たちが再会した日から6日後、よう

やく湊くんは現れた」

湊、小走りでやって来る。

湊 「糸子さん、お待たせしてすみません」

糸子 「遅いよ……」

湊 「ほんの1、2分じゃないですか」

○花と緑のテーマパーク（夜）（手帳）

湊と糸子、イルミネーションで作られ

た光のトンネルを歩いている。

糸子 「プラネタリウムの代わりになるかな」

湊 「なりませんよ。別物ですから」

紬 N 「予感がした。私たちは急速に遠ざかっ

ているんじゃないか」

○駅前（朝）（手帳）

糸子、寂しそうに待ちぼうけしている。

紬N「恐れた通り、次に会えたのは私たちが

再会した日から24日も経ってからだった」

湊、息を切らし、糸子にすがりつく。

糸子「わっ、びっくりした」

湊「俺、どこかおかしいですか？」

○ホテル・客室（夜）（手帳）

湊、通話を切り、寝台に仰向けになる。

紬N「いつ終わってもおかしくなかった。悔

いを残したまま終わるのはイヤだった」

糸子、仰向けの湊にまたがる。

紬N「この先は、とても書けない」

○同・同（朝）（手帳）

糸子、ゆっくりと目を覚ます。

隣には誰もいない。

紬 N 「朝になると、湊くんはいなかった」

○同・同（夜）（手帳）

糸子、誰もいない寝台を撫でる。

紬 N 「それから、必ず同じベッドを寝床にした。目が覚めた時そばにいてあげたかった」

○同・同（朝）（手帳）

糸子、ゆっくりと目を覚ます。

すぐ隣で湊が寝ている。

紬 N 「再会した日から80日後、また湊くん
に会えた。間隔は徐々に開いている」

湊、目を覚まし、シーツで体を隠す。

湊 「今ならもっと上手くできるんですけど」

糸子 「へえー、証明してみる？」

紬 N 「たたくさん愛し合った」

○同・トイレ（手帳）

糸子、呆然と立ちつくしている。

紬 N 「思ってもみななかったことが起きた」

妊娠検査薬が陽性を示している。

紬 N 「検査は陽性だった」

○同・客室（夜）（手帳）

机の上に本が積み上げられている。

糸子、手帳に数式を書きこんでいる。

時折手を止め、頭を悩ませる。

紬 N 「湊くんがこの世界に現れたのは、再会

した日を 0 として 1 日後、6 日後、24 日

後、80 日後……。次はいつ？」

糸子、ハッと閃き、オイラーの多面体

定理について書かれた本を開く。

手帳に数式を書き込む。

「 $n*(n+1)*2^{(n-2)}$ 」

紬 N 「1、6、24、80。多次元立方体の

面の公式にあてはまった」

糸子、次々と手帳に数字を書き込む。

紬 N 「この法則が続くなら、次に会えるのは

0 地点から 240 日後。その次は 672 日

後。そのまた次は 1792 日後。その先は、

もう私とは認識できないだろう。私たちは違う次元に存在し、誰かの気まぐれで同じ面に現れる無力な人形のような存在だった」

○同・同（朝）（手帳）

紬 N 「0 地点から 240 日後」

糸子、お腹が大きくなっている。

隠すようにゆったりした服を着る。

○駅前（朝）（手帳）

糸子、寂しそうに待ちぼうけしている。

紬 N 「会えるはずの日に、湊くんは現れなかった。ある可能性に思い当たった」

○綾織家・外（夕）（手帳）

湊、扉にもたれかかり、放心している。

紬 N 「上手くできるだろうか。喋らなければいけないことを何度も反復した。失敗したら、私たちが再会した事実も消えるだろう」

糸子、覚悟を決め、湊に声を掛ける。

糸子「こんにちは」

湊「あなたは、誰ですか？」

糸子「私は糸子。綾織紬の従姉」

○産婦人科・病室（夜）（手帳）

糸子、憔悴し、寝台に横になっている。

紬N「神様は、どれだけ私のわがママを許してくれるのだろう」

糸子、産まれて間もない赤子を助産師から受け取る。

糸子「ごめんね……」

○同・同（朝）（手帳）

病室に陽の光が差し込んでいる。

糸子、驚いた顔で赤子を抱いている。

紬N「この子も、繰り返す世界の中にあつた。別々の次元に存在する私たちの子だからか、全てが特別だった」

○駅前通り（朝）（手帳）

糸子、ビルから出て、湊と鉢合わせる。

紬 N 「0 地点から 6 7 2 日後、託児所から出るところを見られた」

湊 「ここに住んでるんですか？」

湊、ビルを見上げる。

糸子、すかさず湊の袖を引く。

紬 N 「もっと慎重に行動しよう」

○水族館（手帳）

湊と糸子、寄り添って水槽を見ている。

湊 「距離、近くないですか？」

糸子 「海外なら普通だよ」

紬 N 「久しぶりのデートを満喫した」

○綾織の家・紬の部屋（夜）（手帳）

糸子、机で書き物をしている。

紬 N 「明日は 0 地点から 1 7 9 2 日後、長いようであつという間だった。初めての子育てに翻弄されて、息つく間もなかった」

寝台で子どもが寝息を立てている。

毛布を深くかぶり、顔はよく見えない。

紬 N 「神様には随分わがままをきいて貰った。このところ、心残りがなくなっているのを感じる。この世界を追い出される前に伝えなければいけない。彼が、彼の人生を歩んでいけるように、死んだ私のことは忘れて元の世界に戻るように、と」

糸子、ペンを置き、立ち上がる。

袖がふれて、手帳が机の下に落ちる。

糸子、気付かず、姿見の前に立つ。

紬 N 「明日は何を着ていこう。3年ぶりのデートだ。老けたと思われるのは怖いけど、楽しみな気持ちの方が強い。思えば、デートの続きがしたくてこの世界に居座り続けたようなものだ。きっと、最後のデートになる。楽しんでくれるだろうか」

○同・同（夜）

湊、手帳を持つ手が小さく震えている。

手帳の最後に「楽しんでくれるだろう」

か」と書かれている。

○噴水公園（回想）

湊、怪訝そうに糸子を睨んでいる。

湊 「そんなことのために、俺に嘘をついた
んですか？」

× × ×

湊 「どうすれば、このくだらない世界から

抜け出せますか？」

× × ×

糸子「ごめんね。バイバイ……」

○綾織家・外（夜）

湊、勢いよく扉を開けて駆け出す。

すぐに転倒し、手帳が手から離れる。

四つん這いで拾い上げ、抱きしめる。

湊 「ごめん、綾織……。ごめん……」

○駅前通り（夜）

湊、右に左にふらふらと歩いている。

通行人が迷惑そうに湊を睨む。

○駅前（朝）（日替り）

湊、ぶつぶつ呟きながら歩いている。
髪も髭も伸び放題になっている。

○高校・校舎内（夕）（日替り）

湊、虚ろな目で歩いている。
手帳は紙の束になっている。

○並木道（日替り）

湊、ふらふらとよろめき、座り込む。

× × ×

浮浪者（湊）、ボロボロの紙の束を手
に、歩道に座りこんでいる。

浮浪者「今日はやけに冷えるな。雪が降った
りして。なんて、ははは……」

通行人が迷惑そうに浮浪者を避ける。

浮浪者、高熱で朦朧としている。

浮浪者「寒い。寒いなあ。明日は会えるかな。

会えるといいなあ。綾織……」

浮浪者、ゆっくりと目を閉じる。

ふと、子どもの足音が間近に聞こえ、

面倒くさそうに目を開ける。

女の子、浮浪者をじっと見ている。

女の子「まいご？ ずっとひとりだよ」

浮浪者「……君こそ迷子じゃないのか」

女の子「（笑って）おなじこといつてる」

浮浪者、目を見開いて驚く。

浮浪者「そうか、そういうことか……」

女の子「うん」

浮浪者「君に頼みがある。公園で迷子になっ

てる人に伝えて欲しいことがあるんだ」

女の子「いいよ」

女の子、駆け出し、すぐ見えなくなる。

浮浪者、朦朧としている。

足音と共に女の子が戻ってくる。

女の子「ねえ、なんてつたえるんだっけ？」

浮浪者「……」

○噴水公園（朝）（日替り）

女の子、ベンチに駆け寄る。

女の子「きいてきたよー」

ベンチには誰もいない。

女の子、首をかしげる。

○クレープ屋・屋外ベンチ

湊と紬、クレープを食べている。

紬「おいしい！」

湊「この辺で一番美味しいんだって」

紬「それも雑誌で調べたの？」

湊「うん、初めてのデートだから……」

湊、話の途中で突然辺りを見回す。

湊「なんか、子どもの声が聞こえない？」

紬「何も聞こえないけど」

湊「車がどうこうって……」

湊、ふと車道を見て、硬直する。

紬「どうしたの？」

湊、紬を思い切り突き飛ばす。

紬、ベンチから転げ落ちる。

次の瞬間、大型トラックが猛スピードでベンチに突っ込む。

×

×

×

湊、ゆっくりと目を覚ます。

目の前にトラックのシャーシがある。

離れた所で紬が倒れている。

紬 「湊くん……」

紬、這いずり、湊に近づく。

湊、真っ青な顔でかすかに口を動かす。

湊 「よかった……。君が無事で……」

湊、ゆっくりと目を閉じる。

○一軒家・居間（夢）

女の子、人形遊びをしている。

糸子、隣に座り、女の子を膝にのせる。

糸子 「どこにいたの？ 探したのよ」

女の子 「パパのところ」

糸子 「何言ってるの。パパはお仕事でしょう」

女の子 「ほんとだよ」

糸子 「かくれんぼしないでね。ママ、見つけ

られないから」

女の子「ほんとなのになー」

○病院・病室（日替り）

湊、ゆっくりと目を開ける。

紬、湊の顔を覗き込んでいる。

紬 「湊くん！」

湊と紬、頭や腕に包帯が巻かれている。

湊 「綾織、ここは？」

紬 「病院。心配したんだよ」

紬、涙ぐむ。

紬 「先生、呼んでくるね」

湊 「待って……。今日は何日？」

紬 「5月6日。丸一日、寝てたんだよ」

○同・中庭

湊と紬、ベンチに座っている。

少し包帯はあるが、顔は明るい。

紬 「大怪我した人がいなくて本当よかった」

湊 「綾織も頭を打ったって聞いたけど」

紬 「CTに異常なし。長い夢を見たけどね」

湊 「夢？」

紬 「うん、女の子の夢。本来だったら行けないはずの世界や時間を自由に行き来する、ちよつとおてんばな女の子」

湊 「……」

紬 「お別れするのが寂しかったな……」

湊 「きつと、すぐに会えるよ」

紬、湊をじつと睨む。

紬 「何か、やらしいこと考えてない？」

湊 「か、考えてないよ」

紬 「怪しいな。湊くん、すぐ浮気するから」

湊 「あれは浮気に入らないだろ」

紬 「入るような、入らないような」

湊と紬、笑い合い、ふと沈黙する。

湊 「もしかして、キスするタイミングだった？」

紬 「うん、今もそうだよ」

湊と紬、ぎこちなくキスをする。

(了)